合格発表数の予測

重複合格などの理由で入学辞退者が発生するため、入学定員を確保するためには合格発表数を多めにする必要がある。このためには何等かの方法でその予測を行わねばならない。このため(1)選考に使用する総合成績が判明した時点で、その成績順に一人ずつ併願大学不合格の確率、重複合格するが本学入学の確率、私立大学等へ脱落しない確率を計算して予測する確率論的方法と、(2)共通第1次学力試験成績を点数階層に分け、階層毎に併願大学調査を行い、重複合格した場合に本学に入学する割合を求める点数分布による方法を報告している大学がある。ただし、62年度は確率論的方法によって定員の1割を越える入学者を迎える結果となった。その後の検討により定員の多い場合は誤差の累積が多くなる方法は不向きで、(2)の方法が適当であろうとの結論に達した。

その他のテーマ

入試研究の動向として以上述べた分類内容に属さないその他の調査研究テーマには、入試業務の情報処理、高校側等との懇談、国家試験などがあり、これらについては昭和62年度も採りあげられ、報告されている。

受験機会複数化実施に伴い、入試事務処理の複雑化及び処理量の増大に対処して、パソコンを活用した入試業務処理が各大学で盛んに行われるようになってきている。ある大学では、定員に対する割増し合格発表者数の率を推定するために、確率論的方法を用いたプログラムを作成した。また、追跡調査を目的に、高校調査書データを含む入試データ、新入生のアンケート結果、入学後の成績、卒業研究評価などを計算機用ファイルとして利用していることを報告した大学もあり、入学試験の成績データを追跡調査・計数処理のためにファイリングするに際し、機密保持のためのプログラムをTurbo Pascalを利用して簡潔に書いたことを報告した大学もある。

東京工業大学は文部省の委託を受け、「大学入学者選抜に関する学内組織の在り方」に関して調査検討（昭和61・62年度）をし、その結果とともに、望ましい学内組織の在り方として、二つのモデル組織の提案を行っている。

高校側等との懇談については、ある大学において県教育委員会、県立高校の高校長会会長、高校進路指導研究会会長、高校進路指導者らとの懇談会が開催され、各学部の紹介やAB分割、「新テスト」など入試改革をめぐる諸問題について討議が行われたことが報告されている。このような懇談会を催している大学の数は近年かなり増加してきているが、受験生側へ正しい大学情報・進学情報を提供することの重要性が認

識されてきている現在、大学入試センターが開発したハートシステムと並行して、益々多くの大学が積極的に高校側とのコミュニケーションを検討すべきであろう。

昭和62年度は、医師国家試験についての報告が3件あった。いずれも、医師国家試験の不合格者について、入学時の高校調査書との相関、入学時の成績（序列）、専門課程進学時の年令、医学部4年間の各教科成績、在学中の留年回数、卒業時の医学専門課程全教科の成績（順位）との関係などを、図表を混じえて報告している。